【研究ノート】　（城西人文研究第12号）

グスターフ・フライタークの〈Soll und Haben〉

鈴木敏夫

(1) 作品成立の時代的，思想的背景

〈Soll und Haben〉の作者グスターフ・フライターク (Gustav Freytag) は現在はポーランド領になっているシュレージェン地方の小都市クロイツブルク (Kreuzburg) で1816年7月13日に生まれた。父は医師であると同時に市長でもあった。

ポーランドは18世紀末に3回にわたる分割で滅亡の悲運を味うことになったが，これと関連して1776年にはシュレージェンに居住する全てのユダヤ人がポーランド領のシュレージェンに集められ，主として居酒屋や旅館を経営したと云われている。これも「兵隊王」と云われたフリートリヒ・ヴィルヘルム一世にはじまるポーランド国民のゲルマン化政策によるものである。

また1848年の3月革命直後にプロイセン領ポーゼン州では，この地に住むポーランド人の独立運動が起っている。

この作品が成立したのは1855年であるが，その作者がドイツ領とはいえ，シュレージェンという土地の複雑な歴史的・政治的背景の中で生まれ，育ったということはこの作品の成立，内容と舞台の設定に大きな影響があったであろうことは想像に難くない。

1835年ギムナジュウム卒業後先づブレスラウ大学の August Heinrich von Fallersleben 教授につき，次いで翌1836年にはベルリン大学に移って Karl

Lachmann 教授の下で独文学の研究を続けた。1839年には教授資格を取得しブレスラウ大学で私講師になるが，1843年には政治的理由から教授志望に失敗し，大学での教職に留まることを断念した。

1848年にはライプツィヒに移り，文芸批評家ユリアン・シュミット（Julian Schmidt）と共同で国民自由主義的市民主義を標榜する，当時大きな勢力を有していた政治・文芸雑誌〈グレンツボーテン〉（Grenzboten）の編集にたずさわることになった。小ドイツ主義に立つドイツ統一という政治的主張によって1852年にはザクセン・コーブルク―ゴータ公エルンスト２世と交友関係が生じ，２年後には同公から宮中顧問官に任命された。フライタークの代表作の一つである喜劇〈ジャーナリスト〉（Die Journalisten）に次いで1855年には小説〈Soll und Haben〉を書き上げた。1867年には北ドイツ議会にチューリンゲン選出の国民自由党国会議員となり，1870年まで政界で活躍した。曽つての共同編集者であったシュミットが〈グレンツボーテン〉を脱けたあと，フライターク自身も1870年には脱退した。1886年にはプロイセン勲功章（Pour le mérite）を授与されたが，爵位は辞退したと云われる。それは彼が市民階級の味方であって，貴族の仲間入りをいさぎよしとしなかったからと思われる。

さて最初に作者の年譜を極く大まかに要約してみたが，それをもう少し詳しく検討してみると，「19世紀初頭から1848年の３月革命に至る時期のドイツの自由主義と呼ばれる政治的・精神的運動は特にナポレオンによる外国の支配からの民族解放の要求によるもので，この運動の中核となる自由の理念は国家と対立するものでなく，その補完物であり，国家の中でのみ，また国家と共にのみ貫徹されるという思考様式が確立した[(1)]。」と云われている。フライタークの場合プロイセンを中心とする小ドイツ主義に基づくドイツ統一運動への参加という形をとって現われ，たとえ極端な国家主義を志向しなくとも，民族主義の色彩を帯びざるを得なかったと考えられる。

政治と文学の雑誌〈グレンツボーテン〉は1848年当時の予約購読者数が凡そ4,000部あったと伝えられているが，当時の文学思潮のレアリズムの理論の牙城で権威があり，ラーベ（Wilhelm Raabe）のような大作家でも作品を批評に取

り上げてもらうことができなかった。ユリアン・シュミットは編集者の一人であったが，ヘーゲル左派の指導者とも関係があり，その文学批評はフライタークにとって急進的にすぎたようである。批評・編集の仕事と平行して文学史の著述にも力を入れていた。フライタークがこの雑誌の評論ではドラマの問題に係り合ったのに対して，シュミットは一般的美学の問題，特に小説について論じた。

当時のレアリズムの文学理論家達はその理論の構築にあたり啓蒙主義のレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) をお手本にしただけでなく，特に文学のジャンル論の点ではヨーロッパの伝統詩学のジャンル規範に強く拘束されており，シュミットの伝えるところでは「ジャンルのヒエラルヒーの中ではドラマが依然として首位にあった(2)」ということで，それはフライタークの作品の中に〈ドラマの技術〉(Die Technik des Dramas) というドラマトゥルギーの書があることからも納得のいくところである。文学のジャンルの中では後発組の小説は伝統詩学の規範からはは み出してしまい，フライタークにあってはドラマの形式・内容の規範の小説への応用が行なわれた。

いずれにせよ当時のレアリズムの文学理論からすると小説は小市民の日常世界と労働の世界を対象としなくてはならないのであって，たとえば芸術家も含めた社会のアウトサイダー，市民社会の住民と云えるか否かが疑しい人物を作品に登場させることが，レアリズムの綱領に適うかどうか問題とされていた。

(2) 作品の梗概

この物語の主人公アントン・ヴォールファールトはシュレージェン地方の小都市オストラウ (Ostrau) で生まれた。父は会計官で，主人公は一人息子として経済的に豊かとは云えないが，両親の愛情に育まれて成長するが，ギムナジュウム卒業の前に母を，卒業直後に父を失ない天涯の孤児になる。良心的で職務に忠実な父が，古い書類の中に一枚の借用証を発見するが，それはポーゼン市のある地主が首都ブレスラウ市のある有名な商会に支払義務のあることを記した相当な金額の借用証であり，これが正当な手続きを経て商会に渡されたこ

とで，その商会は地主の後継者達との訴訟事件に結着をつけることができ，会計官への恩返しとして当時は貴重品であった植民地産品の砂糖と珈琲を毎年のクリスマスのプレゼントとして贈ることになる。主人公アントンは多面的な才能に恵まれており，ギムナジュウム卒業迄に先生方からあるいは画家に，あるいは文献学者になる素質があると賞められているが，このプレゼントも一つの契機となり，異国の香りのする商品や，それを取扱う商会の仕事に夢を抱くことになる。主人公の父はこの商会との縁で息子をここで商人見習として採用してもらうことを頼みこんでいたので，結局この職業が主人公のその後の人生を決定づけることになる。この商会こそがシュレーター商会で，かなり規模の大きな食料品・雑貨商である。中国輸入の絵入り木箱，コンゴ産の籐製品，メキシコの染料材，珈琲，巻葉煙草，アフリカ産の椰子油，ポーランド産のタール，象牙などが取扱商店になっている。

主人公はこの商会の帳場係になるが，貴族の無給見習から，専ら肉体労働に従事する仲仕まで様々な人々と交き合い商人としての知識と人間的な視野を広めていく。

商会の主人シュレーターは，貴族とは一線を画す，市民社会の秩序，世界観の代表者で，妻を失ったあと再婚せず，伯母と主人公より年齢の若い妹のザビーネと生活している。主人公アントンはザビーネに好意を寄せているが，彼女の方は無給見習の貴族フィンクに心を寄せているように見える。商会のあるブレスラウ市から余り遠くないポーランドで暴動が起った時，主人公はその土地にある商会の財産を保全するために店主と共に生命の危険を冒す。変化の少ない日常生活の中でのこうした劇的な事件を経て，主人公は店主や同僚達の信用を得て商会の中で昇進していく。

無給見習のフィンクは貴族であって，市民階級に対立する世界の代表者の一人である。市民の世界の固苦しいまでの秩序や序列の尊重，起伏のない単調な生活からははみ出した存在で，かつ社交家である。身分違いの主人公には好意と関心を持っていて，貴族の社交界に彼を連れていく。結局身分的に市民の世界から脱け出せない主人公をその世界の軌道から脱線させ破滅させたかも知れ

ぬいわばメフィストの役割を演じている。主人公はこの社交界でロートザッテル家の娘レノーレと再会する。最初に会ったのは主人公が故郷を発ってシュレーター商会へ赴く途上偶然彼女の住む館のそばを通りかかった時のことである。この時ロートザッテルの館は主人公の目に貴族の栄華を象徴するものと映ったが，それは表面的なことで，現実にはロートザッテル家はその所領地からの収入では既に経済的に成り立っていかなくなっている。没落から脱するために，ロートザッテル男爵は投機事業に手を出し，ヒルシュ・エーレンタールとファイテル・イッツィヒという２人のユダヤ人の高利貸の手中に陥ちてしまう。娘のレノーレは主人公の青春の憧憬の的であり，自己の属するのとは異なった貴族という未知の世界の，しかもその醜悪な側面をことごとく排除した，純粋な美のシンボルであるが，その貴族の世界の仮面に欺かれて彼女とその一家を経済的破綻の淵から救い出すことに主人公は生き甲斐を見出すのである。

そのため主人公はその市民的勤勉さと表裏のない人柄でかち得たシュレーター商会での高い地位を一時棄てることになる。

主人公はポーランドにあるロートザッテル家の所領地の経営に成功し財政的に再興させるが，そこで彼が受けた非人間的な待遇は，主人公があくまでも市民階級の一員であって，貴族ではなく，また貴族にもなり得ないという冷厳な事実を示している。男爵は主人公が彼女に対する好意故に尽力してきた労を無視して娘のレノーレをフィンクの嫁にすることを決めてしまう。

この事実は市民階級と貴族とは身分的に和解できないという意識を決定的なものにさせ，主人公は疎遠になっていたシュレーター商会に戻っていくことになるが，店主は彼を暖かく迎えいれる。店主は主人公を妹の婿にとひそかに望み，妹のザビーネ自身も彼を待っていたからである。

シュレーター商会の帳場に徒弟として人生の一歩を踏み出した主人公は，それまでの迷いと波乱に満ちた半生の貸借対照表を清算し，ザビーネと結婚し，商会の共同経営者として新しい生活の一歩を踏み出すことになる。

(3) 作品の表現形式，理念と構成

J・シュミット(3)は小説というジャンルについて「時代の傾向は，芸術からも教訓をうけることを期待する方向にある。また風俗や社会の中にみられる世の中の成り行きの法則についても教訓を期待している。この点で小説はドラマ以上の多くのことを成し遂げることができる。何故かというと小説は全体的な観察と分析の点でより大きな活動の余地を残しているからだ(4)。」と述べて，レアリズムの理論からみた小説というジャンルの重要性を強調している。また〈ドイツ・レアリズムの小説とその理論〉(Roman und Romantheorie des deutschen Realismus)の編者ヘルムート・ヴィドハンマー(Helmuth Widhammer)は，O・ルートヴィヒ(Otto Ludwig)の〈小説研究〉(Romanstudien)の「ドラマの主人公は自分の歴史をつくっていく。小説の主人公は自分の歴史を体験する。それどころか歴史が小説の主人公をつくっていくということさえ可能である(5)。」という文章を引用し，市民階級がヘゲモニーを掌握していないドイツではイギリスやフランスとは異なり，時代小説(Zeitroman)は重要な意味をもたず，発展小説(Entwicklungsroman)や歴史小説が優勢であると述べている。

こういった当時の文学理論をフライターク自身充分知っていたと思われる。〈Soll und Haben〉は市民階級に属する主人公の人間的成長をたどりながら物語が展開していくので，発展小説と呼ばれるのは当然のことであるが，ほぼ同時代に初稿の出たG・ケラー(Gottfried Keller)の〈緑のハインリヒ〉(Der grüne Heinrich)やさらに，1795年に書かれ，発展小説又は教養小説の典型とされるゲーテの〈ヴィルヘルム・マイスター〉(Wilhelm Meisters Lehrjahre)の主人公がそれぞれ画家や演劇人という芸術家を志望して人生を歩みはじめていくことから併せて芸術家小説という名称が与えられるのに較べて異質で，主人公は迷いながらも商人，経済人の世界をひたすら生きぬき，市民としての努力，人間的成長の結果として成功して自から経営者の座につくのである。

幼時に印象づけられた憧憬の世界，つまり商業の世界は，主人公が成長して

幻想が現実の実業の世界に変っても，この商業世界への信仰は揺がず存続し，主人公の生活の営まれる家族的なシュレーター商会の外にある貴族やユダヤ人そしてポーランド人の世界との接触も，精神の健全さ，勤勉と忠誠心の支配する市民社会への帰属意識に支えられて，深刻な批判や懐疑からアウトサイダーになることはなかった。

フライタークにとって，人生に対して懐疑的，悲観的，批判的な芸術家，いわゆる虚業を生業とする芸術家を主人公とすることは，彼の人生観からしても，文学を教育の手段とするレアリズムの理論からしても相応しくないことであったと考えられる。

フライタークは「小説はドイツ国民の姿を，その有能さの見出されるところ，つまり労働において，探っていかなくてはならない」というJ・シュミットのモットーをこの作品の巻頭に掲げているが，農業や手工業を生業とする人々の姿においてではなく，商人の世界に舞台を設定した。このことは想像するに，国家という枠組の中の市民社会の道徳や秩序を作品の中でもっとも効果的に具体的な実例をもって描き出すためには，当時の農業や手工業の人的構成の規模が，家族中心の社会性に乏しいものであったことから，場所も首都にあるかなり大きな規模をもつシュレーター商会を舞台とするのが好ましいとみたからに相違ない。また作品の扉に掲げられたモットーと共に，作品の冒頭に記されたザクセン・コーブルク—ゴータ公エルンスト2世への献辞が，当時のドイツの精神的状況の要約であり，それに対応すべき詩人の責任と自覚の表明がこの小説の理念と成立の動機を明確に表現している。

作品は6部から成立しており，カーフィッツ (Dieter Kafitz) の〈現実体験の手段としての人物の配置〉(Figurenkonstellation als Mittel der Wirklichkeitserfassung) ではこの小説の構成，とくにその登場人物の対照的配置がフライタークの〈ドラマの技術〉(Die Technik des Dramas) の理論の実践的応用であるとしているが，この作品の分析にすぐれた視点を提供してくれる。カーフィッツは第1部が序章，第2部がそれをうけた展開部，第3部がクライマックス，第4・5部が方向転換，第6部が破局という劇的構成であると指摘しているが，

ここでは市民階級と貴族，市民階級とユダヤ人，ドイツ人とポーランド人という対比的組合せがどのような内容であるかを簡単にまとめてみたいと思う。

市民と貴族の対比はドイツ人内部での身分上の対立であるが，両者の和解は実現できない。双方の登場人物の中にその対立を止揚することのできる見識のある人物が登場してこないのである。

ドイツ市民とユダヤ人及びポーランド人との対比は例えば市民階級の側からする他方の排斥，排除という明確な対立意識や行動は存在しないが，市民の側の優位を強調するため，相手方の特性描写にマイナスの符号がつけられているにすぎないと読めるが，ひとたび民族的対決の意識がむき出しになると，ショウヴィニズムの攻撃の格好の対象になり得ることは想像に難くない。

市民的生活の中心的な場は主人公の第二の故郷になったシュレーター商会である。こういった家父長的，家族中心の経営方式の商家は1850年代半ばには大部分が消滅してしまったとされているが，店主のシュレーター氏と妹のザビーネ，それに伯母の3人家族の他に，いわゆるデスクワークをつとめる帳場係の店員達は一種の「精神共同体」をつくり，彼ら自からが主張するところの，アメリカ式ではない，ドイツ式の，金銭崇拝とは異なった労働に誇りをもって働いている。帳場係は全員が商会の屋敷の中で暮し，店主一家と寝食を共にしている。この生活には勤務年限の長短を基準にした厳しい序列制度が支配し，新入りの主人公は末席に甘んじなくてはならない。

シュレーター商会の仕事の内容の記述の点からみると，作者フライタークの重点の置き方が「会社の仕事の社会的有用性ではなく，人間的，教訓的な側面を示そう(6)」としていること，店主のシュレーター氏の人物の特性や仕事の進め方が，ユダヤ人商人のエーレンタール氏との対比で，あくまでも商業道徳を尊重していることを強調している。商会は首都ブレスラウ市の貴族階級の居住区に接した一画にあり，店舗の構えは立派で品位がある。主人公はここで寝起きをしている。

一方主人公アントンと小学校時代からの顔見知りのユダヤ人青年ファイテル・イッツィヒは，同じ日に首都に働きに出てきてエーレンタールの店で働く

ことになるが，彼の住居は旧市街の狭い路地裏にある。アントンとの対比でこのユダヤ青年は，生活環境にとどまらず，その容貌の点でもマイナスの否定的な特性が与えられている。その生活の目標の設定の仕方にも懸隔がある。同じ日に故郷を発った二人はその途中で前後してロートザッテルの館の傍を通ることになる。主人公はこの館に住む夫人と娘に接して，異性に対する若者らしい夢を育くみ，その詩的空想のために，現実には決して踏み越えることのできない市民と貴族の世界の中間を浮遊する状態が長く続く。他方イッツィヒの方は主人公に較べるとはるかに現実的，功利的で夢想の世界に遊ぶことはなく，いつの日か没落しかかっているロートザッテル家の財産を高利貸という手段を用いて奪取しようと考えている。彼にはユダヤ人の拝金思想のシンボル的役割が与えられている。アントンが欲得をはなれてロートザッテル家を防ごうと努力する一方で，彼はそれを水泡に帰そうとしている。

イッツィヒがつとめるユダヤ商人エーレンタール家には息子のベルンハルトが居り，大学で学んだにも拘らず，ユダヤ人故に社会的差別をうけて公的な職務に就くことができない。ベルンハルトはそのため自分の書斉に閉じこもって，社会的に孤立した生活を送っているが，これを作者フライタークのユダヤ人への同情のあらわれと解釈する人がある一方ドイツの側で進めたゲルマン人への同化政策の成果をこういう形で表現したとする解釈もある。

次に貴族の世界を代表するのはシュレーター商会に暫く無給見習として働き，主人公に貴族世界を見聞させたフィンクである。ハンブルク出身で伯父がアメリカに住んでいるという設定で，世界を股にかけて冒険的な生活を送っているが，主人公を案内していく貴族の社交界の情景の描写に見られるように，まさに生活をエンジョイしているという印象を与えてくれる。物語の結末では主人公の憧れていたロートザッテル家の娘レノーレと貴族同志の結婚をする。この結末は市民階級と貴族との身分上の和解の不可能なことを象徴している。ロートザッテル男爵が窮地に立ったとき，シュレーター氏は市民社会では個人の能力と自由な競争が全てで，それに負ければその財産も他人の手に渡さなくてはならないという不文律に従って，本人の能力と無関係に地位と財産を世襲

的に保全しようとする貴族を助けようとはしないのである。

この作品でポーランドは主人公にとって二度舞台となる。本論の冒頭で記したように3月革命直後プロイセン領のポーゼン州でそこに住むポーランド人の独立運動が起ったことが背景になっていると考えられるが，一度目はポーランドに暴動が起り，アントンは店主と共にそこにある商会の財産を守るために生命の危険を冒す。二度目はロートザッテル家の再興のために主人公は商会での昇進を棒にふってまでして，この地の男爵家の所領地で努力をする。

ドイツの東方への領土拡張はすでに中世に始まっているが，この植民地へのドイツ人入植者の秩序正しい，清潔な生活ぶりとポーランド人の無教養，怠惰ぶりとがやはりコントラストを強調して描き出されている。

(4)　〈Soll und Haben〉の受容と評価の歴史

この作品は1855年の出版直後からベストセラーであり，19世紀末には発行部数19万部，1925年の版権消滅時には100万部，1965年には1,222,000部が印刷されたと伝えられるが，1970年代後半には更に三つの新版が出現している。また映画化されていて，第1回は1924年で大成功を収めた。1970年代後半の三つの新版の登場と時を同じくして，第2回目は10回もののシリーズのテレビ放映が企画されたが，実現には至らなかった。

唯この企画が発表されると世間に大きな論議を惹きおこし，フランクフルター・アルゲマイネ紙 (Frankfurter Allgemeine Zeitung) とツァイト紙 (Die Zeit) がこれを取り上げ，ハンス・マイアー (Hans Meyer)，テーオドア・エッシェンブルク (Theodor Eschenburg)，ライナー・ヴェールナー・ファスビンダー (Rainer Werner Fassbinder) のような著名な学者や芸術家が互いに対立する活潑な論争が起った(7)。

〈Soll und Haben〉は作品の生命力が他に例をみないほど強く長いこと，そして論議の種となるようないくつかの問題をはらんでいることから，同時代の批判だけでなく，発表後1世紀を超える間の歴史的状況からする受容や評価の変化をうけるのは当然のことかも知れない。

それを時代を追って眺めてみよう。その代表は先づ同時代のフォンターネ(Theodor Fontane) のもので，出版直後1855年7月26日に書かれた。要約してみると，作品に対しては極めて好意的，肯定的である。「この作品は現代レアリズムの最初の開花であると云っても過言ではない。〔…〕フライタークの小説は最近のイギリス小説のもっとも完全かつ高貴な意味でのドイツ化である。彼の小説は明確にイギリス小説をお手本にしている。個々の点ではイギリス小説の模倣であるが，全体としては根本的に異なっている。フライタークをしてイギリス小説より優位に立たせたのはその理念とその形式である(8)。」しかし同じフォンターネはシュトルム (Theodor Storm)宛の手紙 (1855年6月16日付) では「私はこの作品を天才的な作品とは思いません。しかし模倣ではなく，偉大なお手本を利用して，非天才の成し遂げることのできるものとしては最良のものと思っています(9)。」と述べている。

ヘッベル (Friedrich Hebbel) は「退屈だ(10)」と評し，またその拠って立つイデオロギーから「どうして若い時代のフライタークの作品を熱狂的に読むことができたのか理解できない。〔…〕アントン・ヴォールファールトにおいて創り出されたようなかくも俗物的で退屈な主人公を他の国々の小説には見出せないであろう。〔…〕今日の我々にとって市民の若者に貴族の師という取り合せは全くくだらない。〔…〕文学的には傑作どころではない(11)。」と酷評したのはフランツ・メーリング (Franz Mehring) である。

さてナチズムの時代になるとこの小説のはらむ民族主義，反ユダヤ的傾向がナチズムのイデオローグの手でとり上げられることになるが，文学史家のバルテルス (Adolf Bartels 1862—1945) はその〈ドイツ文学史〉(1924) で「この小説はポーランド的特性とドイツ的特性の明確な対立を，またユダヤ的特性とドイツ的特性の本能的対立を示し，またドイツ的労働に国民的課題をふり当てたかぎりにおいて(12)」評価している。

さて最後にこの小説の最新版 (1977年) でハンス・マイヤーは「今日この小説を読む者は，もはや読者の無批判な感情移入を許さぬ一つの歴史体験と対決させられる。G・フライタークがやがて起った全てのことに責任があるか否か

と問うことは無意味であろうか[13]」の述べているが，この小説が世に出てからほぼ100年を経て起った第二次世界大戦後の現代の代表的批評であって，既に触れた第2回目のテレビ映画化の企画が結局実現しなかった理由も，このマイヤーの指摘するような配慮によるものではなかったかと思われる。

（追記）

この研究ノートは昭和59年10月5日金沢大学で開催された日本独文学会のシンポジュウム「19世紀ドイツ・ロマーンの展開　II」で発表したものに若干加筆したものである。

Text：

Gustav Freytag：Soll und Haben in sechs Büchern. Deutscher Taschehbuch Verlag (C. Hanser) 1978.

Literatur：

（1） 矢田俊隆：近代中欧の自由と民族，第3章参照。

（2） Hans-Joachim Ruckhäberle/Helmuth Widhammer：Roman und Romantheorie des deutschen Realismus. (Athenäum Taschenbücher) S. 129

（3） Julian Schmidt (1818—1886)

（4） J. Schmidt：Bilder aus dem geistigen Leben unserer Zeit. aus Roman und Romantheorie deutschen Realismus. S. 127

（5） Otto Ludwig：Romanstudien. aus ebd.

（6） E. McInnes：Die Poesie des Geschäfts. Social Analysis and Polemic in Freytag's Soll und Haben. S. 101 aus Festechrft für Charlotte Jolles.

（7） Hartmut Steinecke：Gustav Freytag Soll und Haben. Weltbild und Wirkung eines deutschen Bestsellers. aus Horst Denkler (hrsg.)：Romane und Erzählungen des Bürgerlichen Realismus. S. 138.

（8） Hermes Handlexikon Die Klassiker der deutschen Literatur von Gunther Fetzer. S. 90

（9） ebd.

（10） ebd.

（11） ebd.

（12） ebd.

（13） ebd.